

好古集說

卷一

1	5
27	
1	



福羽美静大入関
佐伯利磨編輯

好古集 説

好古社藏版

好古集説序

すつて世よりある人のこころはさうし
とすところばかりあるまじいのである
其よりさういふもののいふところある
とて人々の本心を知るそのものの
を述べるとまじいところあるとある
た今このころの世に幸ひあると
よその世よりさういふものを

門5
第27
巻1

子集

序一

好古社藏版

なりあられさまうーぬ古社うふ友
うきうきうきうきうきうきうきうきうき
能てあいまぬ物のお事ー来歴の希
かきとととととととととととととととと
得るの店とあひあひーはあこれと
物る人あああうーとととととととととと
ぬ古社うううううううううううう
して社うの人ととととととととととと

あうていふあうてあうてあうてあうて
あふ文庫ささささささささささささ
てそ後のうきうきとねうううううう
集説ううううううーこれうきうき
うーとととととととととととととととと
うきうきー将来とあうのうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
その由来とうきうきーぬこれすれい

人の徳なりまゐる
 こと得るのあひは
 まゝとあるとある
 序とす

明治十七年三月

ほく社に長をを國の

美部



凡例

- 一 此書小字録するものゝ本朝の歴史律令格式歌物經
 碑銘等世間の蒙者其割讀譯解一節一はく
 終ひて存するもの其考證或々其明説
- 一 古言雅語等從來解一得能くものゝく其圖く小あて
 古言也今日存く日半使用をく其及方言
- 一 石所舊蹟小はく其説一也世にその其考證及發見
- 一 萬志の學方著書考證類聚等ありて世間小はく其
 世にその一の履歴世系及著書云々
- 一 考子等如蒙僕其他徳を修め郷黨の模範と

なる所より又拓地鑿田脩路等世小公量にあえし
 その美事善行及少傳
 一古書文古器物等學事上の考證とある人より
 所傳主傳來及模圖書よりて西台社文中より送書
 するところの諸説を輯録して以て好古家の参考なり
 併せ書とす

好古集説卷一

目録

内山真純海の歌	初丁
太田垣蓮月臣の小傳及紀事	初丁
明治十七年春季好古會紀事	四丁
大日本史菊池氏傳中質於	十四丁
弘安文書の内容	十七丁
あがみくといふ詞の考	二十丁
安政二年新内裏聖孝紀事萬葉歌詠の詞	三十二丁
祇季好古云出品目録	三十六丁

好古集説卷一

好古社幹事佐伯利磨編輯

同 社長 福岡義靜 同

同 補助 加部徹夫 同校

同 同 宮崎幸磨

内山真龍翁の歌

此原稿は西宮社事草に号社友
福岡西見の寄贈に係り

真龍翁が既解 多て事つら 新 こそ 西宮社三編第七

編少澤なり 然るに 拙家所有 以 志 詠ふ 八年十月とあり

これの海軍のことばをいふ 其れ 時の歌なるの 今本社

より 寄す

文化八年十一月賀茂泉亭仰給日本紀類聚解清書志
大裏仁献上登示給支謹奉之保藝白

神元帝の御方就命の高志らす日新御陰ありし
去天のふくむ何れ傳目嗣の書を七卷ふ巻ふ餘十
つまり五つふまよそ五敷の大宮内奉らるる

遠江國真龍白

太田垣蓮月尼の小傳

第百六十九号社説を印帳
季傳の書願する所あり

蓮月尼ハ小名を謙といひ父を太田垣傳右衛門光古とふ
山名宗念ふはへし但馬守某の後裔ふて代々周知國智
意の里小をありて父ふゆゑありて京師ふ出て智恵院

廣間傳といふ同院の傳り家格す謀々寛政三年の
ころ其愛ふて生れぬ性賢類敷ふて母親深く寵愛
せり母ハ世に去り謙も婿取すといふ年ころふあり
かば近江國彦根人土友某の子を寄して謙ふ阿はせ
男め子史をうんふとふれ里世に打續てて夫をまゝ
こりたりより尼ふなりて蓮月とふありそハ世衆の
ころありきけれ猶密願のころはふを夢て兒ハ爾
といふ人のあるを厭ひてある時いと重文科めて各處に
懸て後死たふより其面顔をやそいひふれを更ふ
いふは徒なりなりとて四十歳のころふや父史を

みきりありしれど後計の病とて陶急をなげぬありので
それより自ら詠める歌を彫に令てひきたたり——を大に
えてはやまゝとねほつゝならはだ都遍の残穢なるとりも
ハそをみやけなりて利を貪ほるとすうろのくせある國
あがり然るのほりこころ序ふ詠歌をくらふ人の客たるを
いとして寂居を定め世に彼處とうけらる位——
はしら西が茂れる神光院の茶所は住持ぬぬ小都人
の口づからえり屋越やこしの蓮月とあらは——よりよからそ
明治八年十二月十日それ西が茂れてふよりぬ半も葉
ちりと持ちやりてその寄由り弊ありぬ痛いとあるあり

まゝひらの趣あり親とやうらよみすゝゝなる
人ひらひらつてきりきりゝゝ海中の神様と云ふ
一冊あり既う世人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
左の一編ハ補助加部家久強録中より記載せりのなる
を小傳と大同中実あるをうて併せてゝゝ付記ゝゝ
考ふ供す

紀烈婦蓮月事

林 鶴染

烈婦蓮月。未詳其姓氏。京師賈人某妻也。美姿儀性聰慧。
習文墨。能和歌。又善陶。家貧。夫病。不能自給。烈婦別開小
店。煮茶供客。以養夫。無幾夫死。寡居自守。恐年尚少。有人

挑之者。雉髮為尼。然天然美容。故態尚存。狡佻少年。或投
艷書。送慙慙。烈婦乃引千斤秤。自按其齒。每按一齒。肅々
有聲。滴々迸血。觀者大驚。皆曰。烈婦々々。自是莫敢挑之
者。嗚呼古之貞婦。有刳耳截鼻以自誓者。烈婦之操。以之
無復所耻矣。曩者。土井存菴還自京師。贈予以蓮月所製
磁碗。々書其自詠和歌一首。甚有風致。予時出啜茶。特覺
茶味之清芳矣。

春季好古會紀事

明治十七年四月廿七日例小仍て春季會を上野東照宮
社陽所小開く當日在京の諸君及地方社貢よりて滞

在せらる、諸君の臨席をうけ、人負たのこと

福羽美静君佐伯利磨君小杉楢卯君佐藤誠君安部玄史
君近藤瓶城君小中村清矩君飯田武郷君木村正辭君師岡
正胤君佐藤弘毅君江刺恒久君森重遠君宗重正君大畑
弘國君志村貞鏡君井上瑞枝君小出肇君久米幹文君福田
理軒君磯多雪窓君阪正臣君植松梅吉君大島利久君松原
安彦君渡邊玄也君久保孝茲君近藤幸殖君大澤清良君
石河正養君内海政雄君黒川真頼君檜木八右衛門君青森縣
城井壽章君千葉縣杉本新太郎君千葉縣なり皆の會幹八井賴國
加部嚴夫宮崎幸磨の文より通計三拾八名會外三名なりと

昨夜暴風激烈且つ天陰て將小雨なりと云因て意不備一瞬
目雨なりと諸君の來會甚く艱苦なりと然る今朝天氣
稍霽れ霞の殘範新雲のそと一是亦松で余等似然とて諸君
の來會を待ち過へり乃ち當日の次第を定むることを
午前第十時着席次社長春季會開迄及好古集説出版の事
を告ぐ次幹事報告次會幹投票(先是改撰規約投票用紙
及筆硯を諸君小領)次開札正午十二時喫飯次古文書古物
類展観午後第四時退散この次第小依り諸君着席あり
て社長福羽君より開會の事及好古集説出版の趣旨
を述べらる其大意を筆記するをたのぞく

諸君の協同盡力不由りて社業漸く進歩し本會の功
を亦大に顯はる真に一大快事なり從來此會を
神宮教院に開設し在此般の事故ありて該所を備
用し難ふより乃ち此所を以て會場と定めしめり又時
限を午前九時着知午後四時散會と定めしめ展覧の
時を緩りし以て考査の樂を盡せんことを欲してあり
今此會を開くべき當り先づ諸君協力の方を謝し
併せて相共り會するの喜ひを述べ又好古雜誌を
明治十六年十月刷行第三編第九号を限り之を廢し
這般更不好古集説を出版す此書たる雜誌と一體

相同しあらすと雖も其趣有るを以て是亦相異なる
を以て彼の活字印刷の新聞誌雜誌の類一時世に廣
告するよりそのより便なりと雖も本社集録
乃ち古事考證を記載し或る古書古物の模圖或
は古画古文書の影寫等を掲載し永く世に傳へて有
益なるものより甚く其便をえることあるは是を
以て此好古集説を本報に彫刻し之を本社に蔵す
其出版の方法を毎月二三葉乃至四五葉彫刻成るべし
則ち之を社實諸君に配賦し相互に古事考證の益
を得るべきを望みす等の便を図り其月を積みて

三千葉あり以て四五十葉の多し小至らる則ち集めて
一冊とす一廣く世に公けし得ん天下と好古の樂を圖る
よしとす又既印刷發行せし好古雜誌を訂正を加へ他日
本版不改彫し以て此書の初篇とす一亦將來永く世に
傳へんとす是れ此書開卷題号の下特に第二編と記載
する所故なり諸君社友諸君此意を了知せられん事を
畢て好古集就在諸君不能賦すはいつて幹事佐伯君報
告書を朗讀せらる

十六年十月廿日以來入社者 人實二十五名此中東京府四名
大阪府壹名神奈川縣壹名群馬縣壹名千葉縣四名愛知縣

三名靜岡縣三名岩手縣一名秋田縣一名福井縣一名富山縣一名
岡山縣一名和歌山縣一名高知縣一名熊本縣一名鹿児島縣一名
地方八縣大阪山梨滋賀山形鳥取大分宮崎鹿兒島沖縄札幌
根室の十一縣あり社友紹介の數ハ小國君三名香取君二名都
君鈴木弘君井野邊君安部君根室君中島五君村上君三
浦君若福君若遠君若堀君若久米君塚本君村岡君尾崎
君太郎君若原君藤岡君井上君若見君島君各一名なり去
年十月改算入社人實數百四十四名小通算十社を總實數百
六十五名此中死亡者十名退社者一名これに控除
すれば現實數百五十三名なり寄書之數十八通此中

大井重君四通會田君三通佐々君小田君各四通川君
逸見君江藤君小國君阿蘇君淺川君見島君各通
有り去年十月収寄書之數百七十九通一通算す
礼名總數百九十七通有り此他社費計算簿寄附
金取扱簿并書籍寄附簿別冊あり此以て一覽あら
ずことを望む此を本社第四回の報告とす

帳簿回覧了て會幹改撰規約投票用紙及票紙を法務局
本會概則第二條参照し會幹一名を改撰すへし有り
會幹中宮崎幸磨の當春季會限り會幹を退き其
代食を投票改撰すへし但本社長及幹より投票の限りある

左の會幹を更し投票すへし其れをそのとす
投票の受取の者を撰ぶと館を爲し同数のとる社食
證牌の号數順改撰ありて撰舉す

諸君各投票あり會幹加部崇矢進て開札し小宮崎幸
磨受取ありて猶ほ此で會幹たるへしと決まり是より
諸君の齎らるる古書文書等の展覧あり其目錄を左に掲ぐ

福羽君出品「西山公手簡一幅」村上天皇天徳三年關詩行事

略記契冲阿一冊「富士の繪」東九翁賢一幅「吉川惟足懷紙

一幅」伴蒿蹊詠草一幅○佐伯君出品「大國隆正翁短冊

六枚一幅○小杉君出品「契冲短冊一幅」さしり翁拙詠上田秋

壹卷「縣居翁傳」由山真一巻「加茂縣至大人遠祖鴨建角見命也初國知志々天皇中國小入麻左軍と爲し時八咫鳥と化て以路を尋仕奉神也此神の美末山代國賀茂大神を齋師朝小遠江國湖郡岡部郷鴨新宮齋奉と文永十年小詔有て此郷を賜ひ乾元年小毛御言の有り有て岡部の地を志めて世々神主たり又大人也此宮人の末末加茂と以岡部と云人々稱て縣居大人と云此謂ける元禄十年岡部郷小生れて享保十八年京上荷田宿祢誨を受寛延三年武藏の田安の殿小仕奉て養の致此御衣賜りて思へ今々爲遠津祖の尊の切あり中祖を詔を遂て

神主たり又遠祖政定者引馬原御軍小切有而二荒山小鎮坐大神御太刀をなん賜ひる今我母此殿小仕奉而古宮の世小起れる幸有て賜物を得るをさるこひて宮曆四年正月あふしてゝ何やの美衣を母氏人のかまふと神や加氣牟と云有今る真多都地」儲光義の像將軍家一幅「梅範小齋」建部綾足筆一幅○佐藤誠君出品「蝦夷太刀」一幅「石鏃」越後國佐渡川一幅「貝葉」錫蘭回物一枚○安部吉出品「菅公の像」雲谷筆一幅「渡唐天神」狩野清信筆一幅「大國主命」英一一幅○小中村君出品「美酒歌」真淵一幅「齋宮」如御一幅「北村季吟自咏自草の詩歌」一幅「世女風俗考」生川春明編二冊「時行修容」喜多村信節一冊○飯田武郷君出品

萬葉緯

金川士清著
十七卷の目

冊

考後風土記
卷上

冊

倭姫命世記
卷上

冊

○木村君

出品。影古鈔本漢書金貨志一卷。原本尾張真福寺所藏。而李唐人之所書云。今閱之文字遒勁。且民字闕末畫。為唐人之書。不容疑也。卷末有式部之印朱印。北宋槧本御注孝經。世所傳諸宋板之書。皆南宋所刻。此獨北宋所刊。狩谷望之嘗獲此本。翻彫以行于世。實文政九年也。望之跋曰。是本敬匡胤恒竟炫通七字闕筆。按敬宋翼祖諱。匡胤太祖諱。恒真宗諱。竟翼祖嫌名。炫太祖嫌名。太祖舊名玄朗通係章獻明肅皇太后家諱。太后劉氏。天聖元年臨朝稱制。令天下皆避父諱。明道二年太后崩

復舊。則知為北宋天聖明道間刻本。正辭曰。卷尾題名後。載孝經音略。每半板十五行。行二十二字。至二十四五字。界長六寸九分。幅五寸。左右雙邊。卷首有脩竹蔭印。又有被齋及狩谷望之二印。卷尾有狩谷望之審定宋本。及湯島狩谷氏求古樓圖書記二印。宋槧本五元論衡。每半板十行。行二十字。至二十一字。界長七寸一分。幅五寸。左右雙邊。板心記刻手名氏。經籍訪古志云。文字遒勁。筆畫端正。絕有顏公筆法。加之鐫刻鮮明。紙質淨緻。墨光煥發。若法帖然。實宋槧之絕佳者。卷中如完慎貞桓徵匡朗竟讓玄殷弘煦構敬樹等字。皆

闕末筆。命祿篇夫如是市虎之訛云々一張。諸本並脫。唯此本歸然獨存。當補其闕。尤為可珍。惜哉第二十六卷至終闕逸。宋槧本編萬卷谷現存目錄二卷。第一至第五第三十二、三十三、三十八、後集第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、九十一卷。每半板十三行。行二十三字。畧長六寸四分。幅四寸三分。元槧本五音集韻十五卷。此書金ノ崇慶元年壬申二成ル。每卷改併五音集韻ト題ス。首ニ韓道昇ノ序アリ。次ニ真定府松水昌黎郡韓孝彦次男韓道昭改併重編。男韓德恩姪韓德惠婿王德珪同詳定。琴臺張仁開板トアリ。

次ニ已丑重刊ノ序アリテ。年号及撰者ノ名ヲ記シ。但目錄ノ末ニ。至元已丑新彫トアリ。至元ハ元ノ世祖ノ年号ニテ。已丑ハ其二十六年ナリ。金ノ崇慶元年ヨリ至元已丑マテハ。七十八年ヲ經タリ。第一卷ノ末ニ。校正人二十名ノ氏名ヲ載ス。第十三卷ノ首ニ。五音改併增添明頭号樣。及十韻号頌。五音檢篇入冊頌アリ。但此一葉後人ノ補寫ニ係ル。第十五卷ノ末ニ。雙聲疊韻法。及六書八體ノ目。又道昭ノ男門人等ノ名字ヲ記シ。次ニ門人寶慶ノ進ムル所ノ皆篇列部之字補添二葉。及已丑重編雜部字二葉アリ。

其第三第五第七第九第十第十一第十三第十四ノ
尾ノ題名ニ。至元大元大朝大安已丑等ノ文字ヲ冠
ス。按ズルニ。至元ハ元ノ年号。大安ハ金ノ年号ナリ。
又大元ハ元ヲイヒ。大朝ハ金ヲ指シタルモノ、如
シ。但此書原ト金ノ大安中ノ刻ニシテ。元ノ至元已
丑ニ重刊シタルモノナリ。明張東海書一幅文云。
不惜光暉讓流月。明河可望不可親。明史卷二百八十
六。列傳第一百七十四。文苑張弼字汝弼。松江華亭人。
成化二年進士。授兵部主事。進員外郎。遷南安知府。地
當兩廣衝。奸人聚山谷為惡。悉捕滅之。毀淫祠百數十

區。建為社學。謝病歸土。民為立祠。弼自幼穎拔。善詩文。
工草書。怪偉跌宕。震撼一世。自號東海。張東海之名。流
播外裔。為詩信手縱筆。多不屬稿。即有所屬。以書故。輒
為人持去。與李東陽謝鐸善。嘗自言。吾平生書不如詩。
詩不如文。東陽戲之曰。英雄欺人。每如此。不足信也。鐸
稱其好學不倦。詩文成一家言。○師圖君出品「天手扶
一箇」平田篤胤翁錢胤翁合筆短冊壹幅「真淵翁消息
一幅」江刺君出品「石笛一箇」○宗君出品「法性寺古通公
書翰附九條當
雲公添鑒一軸」○大畑君出品「契冲阿闍梨萬葉代
匠託草稿一幅」浮世繪舞妓草名
步詳一幅○志村君出品

「家康公より十世祖志村又花御門へ興へる本願朱印一枚」言
内塩屋分給へ興へる口津書四二貫五匁又上村内記分給書
又文林部助下前分給書又熊野河内由丈花寺人白書
山古二ゆ珍書又同五貫又延重河内隔年高部紺上役并
名田原被友書一 成者 成瀬吉 田中部 多々 幸一
天正十年十一月十日志村又花御門「家康公より十世祖志
村茂書」后又云 南無聖「興へる傳馬朱印」傳言分給又自標
子大坂迄下相立是古甲州五右衛門官志村茂書同
石人又下書也 言二月大府中「家康公より書
州會剛院へ興へる書地一枚」西條より寺津會剛院

より京都公言石六斗踏出書二也又永正書相書勤
以下不可言倉慢書也 山古件 天正九年巳年十月十二日
三河書五 金剛院○福田書出品古金銅釋迦佛 印度一軀
○磯前書出品龍燈頭一箇言山正之書短冊一幅○阪書
佐吉相書 枕本等 三冊○加藤書出品春日神鈴一口○渡邊書
出品陸奥田影 床蓮法 一幅「寶成真例翁懷紙一幅」十訓抄
蘇木教 一冊「赫和哥 近來信 一冊」狭衣 本野 一冊「筆陸風土記
屋代輪流翁書 一冊」草纏の样 川崎重義 一冊○近藤藤 幸書出品
番書風翁改書 一冊「契所阿圖梨自詠歌十卷一巻」○石河書出品梅公櫻井輝
訣不圖 菊池書翁書 一幅○松本書出品雲上面包草紙一冊「本下

長嘯子小塩山の記一巻三十枚短冊一帖○井上頼玉出品

秦公及廣隆寺資財帳一軸日本書紀海迹抄夜と云後一冊廿冊之内

鬼法馬一冊法隆寺日記世と云え二冊續添鴻寶秘録五冊

致正神代紀異同平均省原表摩一冊○加部紫雲出品法華

經書一乘院真藏一帖祝王御筆校本倭姫世紀谷川士一冊源氏繪謝益

一帖○宮崎幸磨出品國熊巨翁短冊一枚山延子山本山翁

小短し紙一書一枚○本居君出品木下長嘯子父老松林老

先生時懷紙一幅宣長翁肖像自畫贊一幅○貞外松浦勝老

出品其角虫繪の額一通總計七十三品

午後第四時より各退散せられしなり

編者云ふ小載せしむる小松秀出品の中由山真龍翁の

かゝるる短冊の傳々本居夫人乃五勝寫六の巻小

出する其文相ほうの同二より五勝圖小八巻又二

明和六年十月晦の日と七十三まで二より了たまひぬ

武能園荏原郡品川町赤坂寺の中少林院の山小蘇

とありて二巻大人の書なる某の志するあるまふり

てあるなりなほ又母とをを志するへふもの

なかりそれより又よくありしむ人ふといてあるすへ

くふとありたりてこふ月記す

大日本史菊池氏傳中質疑第八十九号社員佐々豐水の寄贈なる所なり

左の一編と肥後國純麻郡今おの人小摺元雄の著
なり今これを本社小とせて探求家の一覽小供す
我國歴史のよく誤謬を免れざるは大抵引書の不足者
證の詳悉ならざる小因る獨り大日本史の如きハ一大藩
の力を竭し費用を厭ふ時日を願ふす度と全國の書
籍小徴し洽く舊學老儒の説を求む反覆考訂して著述
編集するものなれど家國の正史と稱すは又此史二
優るものなく其嘉徳寺椿の事を載せざるや國史あり
疑言を候する所なりて僅く字句の間亦誤謬あるをハ
信しと然るをざる所なり然とを載る載の下小於て載

百載ありを録す或々小疵極の指すは又無事を傳す
難うらきこ小聊の事實の相違小やある等と竊小疑
圓を生し甚多あるを解小するものありと
其秘略を左小掲ぐ

大日本史一百七十一。列傳第九十六。菊池氏傳。正平
十四年筑後大原戰記中曰。武政將兵一千先登。斬賴
尚子忠資及其裨將三人。武明死之。又武信武貫將兵
一千繼進。與敵兵二萬遇。殊死戰。獲首七百級。虜忠資
弟賴泰。武貫及結城親昭加藤宗高等戰死三百人。と
あり然る小元雄曾て阿蘇文書

肥後國阿蘇郡今地和
華族阿蘇家所居 廣

福寺文書

同國五名神所書書卷福山廣福禪寺所藏

在國する小左の申状及

寄進狀等あり○阿蘇文書「阿蘇大宮司惟澄代院
阿申當社領肥後國郡浦並小河事任去九月五日令
旨守護代武貫並窪田武宗為使節遂其節候之處去
十月一日武宗請文者莅彼處欲沙汰付下地於社家
之處於古保浦者宇土道光代構城廓至小河者顯興
代構要害申異儀之間不及打渡云々同月同日武貫
請文子細同前仍彼證文四通進上之以此旨可有御
披露候恐惶謹言云々平十六年十月十四日肥後守藤原武光堀
進上御奉行所「阿蘇大宮司惟澄申社領當國小河並

郡浦事如去月廿三日令旨者於郡浦者道光代構城
廓至小河者顯興代構要害各申異儀間不及打渡云々
重差遣守護代破却城廓可沙汰下地於惟澄堀早任
被仰下之旨窪田孫次郎相共莅彼所遂其節載起請
文之詞可被注申之狀如件正平十六年十一月七日武光堀
守護代○廣福寺文書「奉寄進師匠大智上人御所畠
地壹町者在肥後國山鹿庄片保田村内也右畠地者
武明重代相傳之私領也為奉報謝四恩三有永代所
奉寄附也仍寄進狀如件正平十七年壬寅七月十九日藤原
武明堀右阿蘇文書載する所也正平十六年の事也

て當時武貴ハ守護代の重賤ナかりて其内政ハ執掌
せられざるを見るハ是ハ唐福吉文書ハ現ハ武明の案
進せしむたハ其の如て同十七年の事ナリ孰モ是ハ平
十四年大原役ナリ三四年経後ハ保る由是觀ハ武貴武明の
二氏ハ大原役ハ戦死せしむたハ是ハ出てハ則勇戦奮闘を
ハ折衝禦侮ハ入てハ則宗家の政治を替ハ民人を安撫
ハ祠訟を審判する等所謂武備ナリ亦文事ナリある
ものナリ柳國歩難義ハ小陰ハ奮然挺ハ身を戦
仁在来ナリ忠臣公土の題ナリと雖モ今二氏の
事ハ能ハズ意ハ平素ナリて之を按ずるハ其未ダ金捷を

与る能ハズして蓋戦中ハ恨を吞て賊多ハ斃せしむると其
賊魁数名を斬獲ハ六甲の大衆を遠ハ賢海の奥ハ馳逐
ハ終ハ宗家の威名ハ九則統一の偉功を奏ハするとは
其功益ハ大小心情ハ快ハ宗家ハ如何ハ此文書の二事ハ
然る當時の事を激するハ是ハ其の如ハ其考證を
未ダナシて遽ハ二氏をハ大原ハ戦死せしむたハ其のと
とを恐ラハ千載其謬誤を傳ふるのニナラズ其又勲功
るものハ徒ハ漸盡ハ威ハ折ハ實ハ無限の事憾と云ふ
信ハ二氏ハ其故ハ地下ハ瞑目せられざるあらんハ切ハ
懐念の是正ハ包明治十六年九月小幡元雄

弘安文書寫

第八十九号社實佐々豊水
の寄贈するところなり

弘安七年四月十二日武蔵桑田より神山由郎へた
くられ古文書以来福富孫士族後征西將軍良成
親王墓堂より條頼長祐せりとその其を儲り得し
よりして佐々豊より郵寄せらるるよりして授け
て
こゝに載す

都波国木室武預

香西小右衛門度景

中一守川太右衛門七

月五日お肥名園所

所千尋の海上をあら

賊取三般內正怒

大和時全武素

得龍和度益令

分取金中度度

吳賊入海中視類

利江所似府子託

斗之打死牛角子

亡之取之何致人

不知不之中院
人之始主何度是
舍我之生平知實
正不似才之起

請文之

以七年宵十二日集會
氏

非心留良氏

何なめといふことの考

吉富佐之の考よりて第七十六号社食
福住正見の考題するところなり

業平朝臣陸奥国小下らけ 在り八十島の野中みて
 小町の稻穂の眼より 薄生ひるる秋風の吹はれそを
 あなめといひをけし小野といひし すすみひきりと
 兼平のけけりけ こと江記無名抄等よりあり
北畠準后紀云ハ
実名抄より
 このあめといふ詞を業平抄塔囊抄小々悲くのをを
 あて神中抄よりありしと云ふとありとあり源氏
 物語今昔集小いへそよりて何なけといひけりといひて
 そとあるを細流抄小けりといひしといひていひそい
 るるけりといふことありしをいひていひるるあなめの例と

す通ふこといふれとも眼より薄のいてるあなめ

眼の痛むを歎きて歌を詠するをいふあなめ此詞極

アナミタ アナメ

仙童ふ五嫂罵曰何由可耐云々といふけり哥ハ四の古字也

正字通小可耐不可耐也といふけり此を古礼かへんの野中

ありて秋風の吹はれけりてを堪えられぬといふけり畢竟

いづれともいふ人ふけりてけりて何なるを歎く意なるけり

左の一篇ハ安政二年新由裏遷幸の記事よりて故

家親戚をけりての御列奉り小なけり一親く母親

と云ふ正の文とありけるなり今よりてこれを正し

わづの二十年けりけりなりていふ時移の雲遷

を敬し、當時鹵簿の標榜を觀するは是るものあり、余嘗て一
本を藏す頗る滋悦ありて、今むくす頃、友人井上瑞茂
君の紹介により、親戚の嗣子峯島親氏より、又其家の所藏
本と模合し、藏本の錯を訂し、欠るるを補ふことを得、
今多親の誼を済て、これを本村より寄す、補助が部、茲に

萬歲鶴龜詞

式部卿丞紀親政

竊とることを恐れ、去年の卯月、あるに、なることを
何れ、大因二、又はや、今、鶴の社、於、
—おは—、その日、多、ちり、長吏、の、すませる
る、ある、贈、護、院、ふ、ゆ、た、り、其、や、り、て、き、なる

なる月の桂庭を行き、と、定め、き、なる、後、大、宮、所、と、く、
あり、なる、この、あり、あり、て、は、水、々、
小、河、の、り、ある、司、の、人、も、なる、
き、又、匠、工、ら、い、く、なる、
贈、を、この、なる、て、人、の、なる、
や、年、号、を、なる、
の、神、皇、月、を、なる、
ふ、の、なる、なる、
き、なる、なる、
あり、なる、なる、

官をすつての張設いはれやのまてめを阿やふか—こゝ
と又なりなれど張供のあふ—こゝにまた嚴なるきう
そくして教をこめて余りふふある張正は又天津神
をさふうけしや松尾やすらぎをこゝで曉て是の
光り毛聲法をやや—ぬるほねくらふふあり
こゝ承りたつる廣橋太細云陽極東頭難處とく余りの
ひて下詔の福をえと—今はすすむつのより志なく此の
うまつりある夜主阿なぬれど張駿を毛の奈の張設
をすみ事法ふやあらん行幸の張僅承りて—う結
志もやふとの—いふ法あへつ、何の友人と—これの理

かゝの長ふまてを弓矢あまのまをせつといひてふくま
よて作ふはくうてと違部のまう東あまの平の腹の
上を海一矢なまを能ひてまをせまふはたけの目の
替のまのなかりなりた兵衛尉のひらねのまをうし
ろめする横刀の尻鞘のあまなり一矢何まのなるを
あてはねの能のまをあまなり尻まの屏のまを
やまいてするまをいひおまなり一矢まをまの腹の
衛尉のまをうしはくまを板ひまのまのまのまを
本地堀組の野太刀兵具まをうしひやのりてまを
まをうしはくま中務正の侍衛なまをうしひやまを

尻まをかたするまをうしはくまをうしはくまを
弓矢あまのまをうしはくまをうしはくまを
あてはねのまをうしはくまをうしはくまを
初ふうちまをうしはくまをうしはくまを
まをうしはくまをうしはくまをうしはくまを
のまをうしはくまをうしはくまをうしはくまを
角矢まをうしはくまをうしはくまをうしはくまを
まをうしはくまをうしはくまをうしはくまを
あまの打のりまをうしはくまをうしはくまを
わまをうしはくまをうしはくまをうしはくまを

尔は又流へり至程細細の衣なりてありて着て金
鍔あり御幸櫓へ入り細云殿より又ありつは乃
うへのもぬ小螺鈿のたけ鷗尻小佩ふて連名の松鉾に
ゐる馬小のり布袴鎧の侍らなりて契の御幸櫓
を護し多まへて近衛代の友人等もはた流ふる人々
の云ひするふ乃流ふはひに云ひするふに在るを
あはる程中あはる程も居間暮のいざゝのはれきりて
はた流ふなりとの云ふなるを云ふ都のてありとてそ
ほゆ礼かくていや高文鶴雲を御階のうへにすむる
南殿の御帳代のほよりちりて曲侍剣璽をもちて立

いてたふふはりてありて二出御なりてはた
のほる朝日の影乃ほのめくといひて流ひありありとて
輿下りの中へ踏くありてはちよつとる頭をへなほ
ありてはたはゆ雲白殿よりいづく御裾は僅にあり
陰陽師とあり及因の流きほふなりて燈なくすこて頭并と
ありてはたはゆ雲白殿よりいづく御裾は僅にあり
か二ありたふふ上福の次将寶剣をもちて御輿の
いれなりとありて仰きこるをいへるたてありありひつむ
り大將殿の三きよのいづくはのいづく
美さふたふふのいづく朝風はなりとてさるひとて

やある聖徳を風なりとあるふはなて毛かこくなん
ねまひ侍るふくて大臣多しをばめ集らせ郷おの
のくおの毛に難き膝をふせ賜ひてのち外門
をきりて出立るふと其家々の舎人と毛々をよ
なる儀鞍のふく美あるそ前繪なると油。小豹の
下からは原鑑有とけふふあつふそのいろ毛毛色
毛すくれある御馬ひきすあてまわすれやを
うちの前給ふはのひの長ハ大臣のひきりそふ
ありてかきふいろふありる襦衣弓筈室を刀の
はをふて毛今日をはれきふそほひてきりてふる

きり繩ありて懐ひつゝ熱門のふふいれハ木の馬ひ
きせうちあるとありて張きさけうあるなりおむ
そのの諸大吏侍なり東常とて志そのひゆなと指
等毛海もさかゝの水平着てきり鞭をきり常きり繩
とありなりしり時りしうのれき御列の改更毛
しと備りて白張の丁あて毛ぬやなくとさむすそ
ける預弁との、作と承はありて張進友をけなつ
きこの水ききを美れ町なり五位の衣冠こころ
うるはしとさや堂もやあむまらひやなるち
佩きて毛繩ゆこのふひかへふり張目附の武士

ひるりをりの扇帽子ふ流袴いろよくとり合せたる
布衣きて候ひつゝ何れも馬の頸を今お川の西より
むかふ町を南ふをれてあゆみすれきうち流れて流
列を次第ふすころあり

あつゝ一紀瑞の流垣のころへは八重雲をわきて
ふ何れもります大將殿御徳を伴ふるへきあまの
興丁等御輿を輦奪りて宮門を出御りしおせは
殿より部^{ヤシ}騾をもちて流あつゝふ流奪れり大
將殿をほめまゐらせ次第のころかきりうるは
き優くふのりてたお小われあふへた御網の次物

たちも持鶴小おきつゝ同く二つふおを並へ候
て弓弦もこのちゆるひなく美きとてあをを離し
たふふ迎衛のそりより志もこのな福衣葉殿中ふ
てこもまる御供小候へるも古代めする様ふそある
れと古と集も毛いりりふと古大うの迎衛のそなり
時のあゆむころりしをたもひてこのへきあいのころ
きをおわひする歌のころふひとあてこれるふも
葉の中よりあつゝの風もききす万迎うはつり
はるりの扇こそききひなくおほくあてて東^{アツ}
陽の如^{ヒマ}大^{マウチ}ま^ギのいろこそききはるうへのききよりそれ

出づるけしひふなうぬよわきとならぬをてかほさう
かういふ姿をあいさういふもいふもいふもいふもいふも
この侍臣貫首をききうて六位のうらうといふも
てなりなれどた刀はさるものさうすゆきおひい
る人きありてたの侍のいふもいふもいふもいふも
のいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
さるものいふもいふもいふもいふもいふもいふも
まへるいふもいふもいふもいふもいふもいふも
あられいふもいふもいふもいふもいふもいふも
ほいふもいふもいふもいふもいふもいふも

掃部二司ハ中原祢家の人々をぬれを政友のよ
そほひりし質素なれと毛下司をさういふもいふも
うなすの友人といふもいふもいふもいふもいふも
さるものいふもいふもいふもいふもいふもいふも
さるものいふもいふもいふもいふもいふもいふも
さへいふもいふもいふもいふもいふもいふも
御供下へる台兵衛位といふもいふもいふもいふも
のいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
のいふもいふもいふもいふもいふもいふも

わのやき、はうまつる色いとやうに今よそそりお街
門臂とのハと遠部なれど厚総のなる馬より
ひる胡録のしきうしめられする螺てんの細き力
折るる襦きりしきうしめられする螺てんの細き力
まゐるへれとおまのらせむことあるなり
てかとのをさか長等ハきうなり
まのせき清てまゐるふ尉こもま尉なれど年ふ
似ぬらうなれどあつて縁ふ柳の半習をさへき
沃懸地螺細乃野古刀もまひる胡録きやの
ふもり履て緋の辻総のなる駒りおのりそ左

筆のきやの太刀はきうなる例の下司をさへき
あるハなこならぬ外衛とてゆ又ひどなり馬ひのへ
て姿ふけるなる流跡の友人いとなめ
きうなる流跡の友人いとなめ
の毛車蘇芳末流の下まれ長うおいて、杏葉
をけななる林難き人けやなる黒毛の牛うな
きうなる流跡の友人いとなめ
一のひまてわらうせ給ふやけもみるおのめ
ねとさへきおのりてまろこまて蘆白玉の車聲
をすーある事もおまひいてられけりぬるを給

洗あぐに洗る二匹ひつハ僞鞍さへな馬を錦の水
引ふしろの杓糸をさへはなれど和漢のさ
有をさへはくされるやうさゆ又ひとつハ連着の
総鞍小豹の切付種芽鉄の手紐いとなのきを舌ハ
三一の志詔のぬ乃鑑おはたも先蹤いちろく
て馬すれりなといひて鞍覆さどうちか合てほろ
しをなく舎人らのまろき縄とりて牽立るるを
今日の流急まへの流料とふふれれしひ
ききりて流附の武士さきり紐のさうまきり
志て垂綴のさうふりきりひや可なる時給の野を

刀佩て夫より馬ふうちゑていてゐてハ御目附の
武士毛風折扇帽子さて布衣の袖口雪隠毛ふさき
手綱をとり町奉行も毛垂綴の冠紐の袍袖を
いとふくとり鑑ひうるはき野を刀さきりるく佩
て乗れる約さへいさきりるまろとも子供なり
後給ふ修ひ給へる龍野の侍従との馬き衣冠さ
しと平靴とたほき時給のた刀を佩るひさ
そめさへをさし又熊の皮の泥障ふさはやのなる鞍
置るふとくまき馬ふうちゑてハ鑑ゆさ
すさ給へハ後よりおもふなとこさきりるさ

むねのちり夜きつる騎馬の足者うち郎等を
ありと随へるこの紅のあつこきうたふる駿馬を
引かれしるゆゑ蒙ありて國の政に給ふ意譯の重
職いちりてきて御先はらふ小舎人難多うの金
鞭のせと高くゆゆれハ流すすうの家ことと云ふ
ゆゑか二ありあひよりはく今日の多めとほを
りうのほありするひねの園くらまで毛りありあひ世
よりある人なふはうりひと並ひぬて頭を毛るる
か二美より二こてをあるなりあり

美ゆよりす二やふのなふありあひはひはふさへ春の

こちこあすれいりや二毛りすらむとゆふはりなる
夢なりはつねの杜毛りちりて三條の大路ふなれき
人等りあふもこととすこねて是華院の流宮ふ角
堂柳毛をまはらする池の坊なとも云えわたり
ふふねてあふふ柳やききぬらむ花と毛りする
宮のなちこち第玉小路を北へをれ給へ八塙町由門の
内分のまうとすのゆあふハ申毛更なり鷹司殿九
條殿の公達やことなき流方くまでありて門近
いてふふひ流簾を毛切せすてをのこ給へり後
院の清門其まひく張の流機殿を設たふふひて

紅葉の御所小あやうす言をけしめなり國母の
張方毛ぬまゝ人あつて後へる力ひて御簾下りし御
さわひを拝まつるそなたうたふ御利美福門代の
外小玉れは六位を言馬なりおありてすむ爵を賜
はりける人うゝ氣過るふなり出車にと宜程門を
せいで幸ゆきぬのて建禮門ちうなれぬたのむ
かちふなりて供奉しるまひて宮門よりなりふへて
あふくをいふさるもさしおのけりつるわさをあ
おまをりておとせうす衛門の陣のひまりなりは
ハ其目をけしめ行事の政官神祇陰陽由合人なと

笏を多くしうして立侍らなれり立樂の櫓散供の
案など設けられて紫のなる張車と毛多あるや
よ水火の臺なるアちひさく女めわくはあふり
のきなりいもきさるなよあつねならぬをまてい
ふくかきねうたふるきねふ白ひをそる花田の汗
衫なりもへる袖ひきわのれつをまてしうつら
き女室らをきしてけりあつたもむやうとおれ
くたてるよ品言くおひいてるもへるほくもこそ
らうるななりはくふの御こほきふ庭と力て
率いてられぬつて黄牛二かう角あるつて毛うけ

今も番の長馬の免なこのひきつのもよく西条ふわのれぬる
さうなとてはつて二とさうひきする流はひいとさうと
さうわられり

言人のそとよかゆく天の月ち影毛さあをふりて
そへなり言のうへてふさあなる笛乃ききりすま
わたりぬる御溝の水いそよ流つふ流れもて波や
志らゆふかたつら心神祇大副殿の麻とありて秋しりふ
水々はひすくく陰陽殿との呪術の流さはあも
いとかつめさるさうとてあなりやくくさる侍あり
あつふも立さのえりき言垣これやうこのぬあめ

のいはくらあなををあらるやうは流積威かやま
まりて御輿建禮門をいらせねはまりて南殿ふ
若御りてぬ実白殿を御車を御門の陣ふと
めさきさうひてやうといりき給ふ園内のたふとて
流さあひ毛うくはまほくあまひ侍れとねは
なく御あらうのあるありへきさうふまぬるへき
よ毛あらすはさ流うりふる事のふたぐりてえ
群三奉らす道後の流うる時をあててかり言ま
あり聲なふめされて言城の外をめぐりあふはす
志て流列衆の小翔平門をいら歩給ひ遷御りて

分りことの法いてより庭上の御氣志をうへは
宣陽殿の御衣古書御覽なり毛二とありてこそ
裁られける法階の櫓を喜ふあへるころやきと
に毛ふはのり庭のひのり何とくをたなり
うけきをふめるいろの美ゆる亂三所の櫓
ふゆきひすしてゆひするはわの舞きひするなり
とひりこちて願の雲のたふりたるを毛いとはす
月華門のかるよりはりてうへへをたはとふら
とておはしあてきいてある櫓の毛いとはさ
やうふ美とるふはたてもは首首城王を肆トヨノアカリふ

めされて櫓の姓を賜ひ一時のには美うとて櫓若
實た信花左信其家た修枝示霜降降益常家之
櫓と萬家集より何とられけるは櫓を殿覧あり
この流よりなり公書よりけふ實せ入なりとるやう
小三とるは今日の御菓子の方と毛なりぬ信
なといひあへり

五段の夜のひのりをそへたりこの櫓のいろなる
あちそれ下侍の人ふ殿との御あつしを承りつ
御あまの勅をふる一人をけめあならぬ御重
はくつた毛のを毛賜りたあふなとく毛のころふ

ほととぎすをこゝろなり

うけなひくうそしの林のまゝこゝろをてらす月三
何うなるか分りぬ侍所をこゝろ言ふなりあゝたゝまき
門をいらぬおとろしき新宮ふ遷御ありて強儀式
ハ法さくしするをさ給へとも強こゝろはきのかきさる
千とををさする御溝のあの池口ふ宿直ふ伺候
しする侍らるゝおとろしき布衣のさふた刀佩き
膝より肩てら弦うぐくくうちならしき
そよや祝なれハ松の枝ふを鶴こそ葉をふくへ歌
のうへふを鶴あそふなりヤレとうたふなと歌

ありたるをりなりし葉葉をふはふと志られてなむ
いくちとあそこのむりなりと鶴とけふよ改つ代と
と鶴やこゝろへそこゝろの池こゝろはきとる強より
らあなりしきとて御列をり式部より延絶親筆

編者曰ふこの時供奉一体の服名人公等の詳細なるハ
昔時松平公の義氏の塾より現今の社貢大公香室
君をて東ふのほせ傳山鳥なりめくる安政登幸也
と地下も目といふもの二重ありあゝその詳なる
を知らずと歌する諸君や同氏ふはふて一月
ありふつ

松季好古會出品目錄

今詳記錄の取書
中より抄出す

明治十七年松季好古會在有樂町の神宮義院より
設けり當日集會諸君の松本廿一冊目次の二
社長福羽重出品「平安友康親筆經切一幅」後免他
尊如漢朗誦集下一卷「小松季以自著の筆吸江軒記軸
付著蹟自著の筆筆刻一冊」○依他書出品「小治橋影
摺本一枚」名和長年書刻本一枚○渡邊重出品「空海筆
經一巻」法隆寺所出の筆筆一巻「長門玉厚使那棚井村安
雲寺法所出泥増一巻」大和式之那柳系村所出泥増一巻
南都極楽院所出の佛一軀「園防公府殿筆福寺所出

石永佛一軀「南海普陀山所產相寶七顆」○寺山重出品
後三年繪坐寫三巻○依藤重出品「古尾七種」○阪田
重出品「容斎筆太安麻呂神田阿礼画像」○安部重出品
「平知重所書長柄長刀」○有信重出品「細川三喜文一幅」
越前重出品「小松重出品」真洞翁筆田安家錠口提書
屏風半双○松本重出品「伊勢貞丈の筆松合家法曹玉要抄
二冊」先人の筆筆源氏圖抄相重一冊○依藤重出品「志満
翁自著の筆筆源氏一冊」高藤重出品「自畫賛一枚」○
堀重出品「近江式古寫本二冊」筑前國宗像所至阿弥陀
經碑及碑陰共摺本二幅同考証を綴○新井重出品「近江

二年大和國宇田郡佐山公賣賣券文一通「尚書零本一
書」或云此唐使傳來の寫本「明石中興寺大學朱江本一冊」白雲洞詠
集三冊「宋淑絲繡義義谷一冊」武藏國大里郡曹山公所書
雷芥一箇○小中村書出品「中院通公公筆公雲法抄一通」
加藤宇弟氏十三夜歌一幅○山口書出品「那須國志碑模
本一幅」那須國碑銘一通「岷江入礎一冊」水戸公公機師
張環銘模本一幅「吉川從長懷紙一幅」○結體書出品「薩
摩國枕の浦所出雷芥一箇」○大畑書出品「土佐光芳筆
竹取物語の繪一帖」右刻人唐像一箇「龍狀古本一箇」因記
一書○是時書出品「宣長新色紙一幅」書右邊書一枚「藤田

東湖歌一枚「三枝台鈴一口」八稜鏡一面○大島書出品「賴
少陽手翰一枚」黃梨木庵茶萬善寺安國一幅「鍊保書
七條一幅」○加部出品「古書平鑑一帖」本朝三台帖一帖本
教諸通歌鶴峯戊申自著り書○言崎出品「里村紹巴書翰一幅」
秋沖阿茶架族冊一幅○曾外磯田山藏書出品「朋製端
溪吐月硯一面」賴雲溪書一聯「周製銅觥一個」肥後國
日置川產端石印材二顆并採石記一綴「自著微古集一冊
以二計六十一品なりと

好古集說卷一終

